令和元年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

（知事賞）　奨励賞

この青い地球と

松山市立久米中学校　三年　ウィジェナヤカ　サクラ

「地球は青かった。」

世界初の有人宇宙飛行士として宇宙船ボストークに単身搭乗した、ユーリイ・ガガーリンの言葉だ。地球の表面の70％は水で覆われている。この言葉を聞くと、やはり地球は水の惑星なのだと感じる。しかし、そんな水の惑星でも人が使える水は0.03％に満たない。水は人間全員の貴重品なのだ。

大切な水はどの国も同じように使えるわけではない。国によって水事情が全く違ってくる。それを強く感じさせられるのはスリランカへ行った時だ。スリランカの水道普及率は50％ほどだ。国の約半分の家庭では井戸から水を汲んで必要な水を確保している。そして水道水をそのまま飲むことはできない。工場などで使用された水が未処理のまま排水されて、川などの水辺に流れていることなどの排水設備の不備、またゴミなどの産業廃棄物の投棄が理由になっているそうだ。スリランカ人の両親は日本に来て水道水が飲めることを知り、「水が不衛生ではないか心配せずに使えるのはすごく良いと思った」と話してくれた。蛇口をひねると綺麗な水が出る。安心して水を飲む。日本では当たり前の行動が、当たり前ではない国がある。日本は豊かで恵まれている国だと改めて実感した。

また、国の水事情が命にまで関わっている国もある。サハラ以南の

アフリカ諸国だ。多くの途上国では、水汲みは子供や女性の仕事。サハラ以南のアフリカ諸国だけでも、330万人を超える子供たちが水の重さに耐えながら、毎日遠い道のりを歩いて水を確保している。しかし、苦労して手に入れた水は、泥や細菌などが混じった危険な水が多い。その汚れた水や不衛生な環境が原因で、毎日800人もの子供が命を落としているそうだ。やっとの思いで手に入れた水は、命と未来を奪う水になってしまっている。私たちが毎日使う水の裏に800人もの命があると思ったら、水を出しっ放しになんてできない。

水は様々な形に変わって私たちのもとへやってくる。時には雨となり、時には雪となる。しかしそれは、安全なものだとは限らない。昨年の七月、この愛媛までも襲った「西日本豪雨災害。」テレビの前でかじりつくように見た映像。あれもまた、水が姿を変えたものだった。水は私たちに恵みを与えてくれるだけではない。なにかのほころびで恐ろしい姿へと変貌するのだ。

あの日から水に対する見方が私の中で少しずつ変わってきていた。水がもたらす災害に備えながら、水の恵みに感謝して大切に使わなければならないと考えるようになった。

しかし、私たち中学生が水に困っている人たちに対して直接何かすることは難しい。では、どうすればいいのか。節水のポスターを気にとめて、手を洗う時に少し意識をしてみる。まずはそこからではないだろうか。水のことを知って、ちょっとした行動に少しの意識を加える。そこから地球が輝いていくのだ。

この青い地球とどうつきあっていくのか。それが未来を生きていく私たちの課題ではないだろうか。